

(1) 全国障害者スポーツ大会視察記*

溝口 元・山口 雅功・矢澤 圭介**

2003年11月8日(土)から10日(月)まで静岡県で行われた第3回全国障害者スポーツ大会(愛称:わかふじ大会)および2004年11月13日(土)から15日(月)まで埼玉県で開催された第4回全国障害者スポーツ大会(愛称:彩の国まごころ大会)を視察する機会を得た。ここではこれらの印象をまとめてみたい。

第3回全国障害者スポーツ大会(わかふじ大会)の開催地と競技種目は袋井市(開会式, 閉会式, 陸上競技, バasketボール, 車椅子Basketボール), 掛川市(アーチェリー, ソフトボール, グランドソフトボール, フライングディスク, フットベースボール), 静岡市(水泳, バレーボール), 浜北市(卓球, サウンドテーブルテニス), 浜松市(ボウリング, バレーボール), 磐田市(サッカー)であった。

第4回全国障害者スポーツ大会(彩の国まごころ大会)は, 熊谷市(開会式, 陸上競技, フライングディスク, 車椅子Basketボール, バレーボール(聴覚障害者)), 深谷市(ソフトボール, Basketボール), 行田市(卓球, 桶川市(ボウリング), 東松山市(サッカー), 妻沼町(グランドソフトボール, フットベースボール), さいたま市(閉会式, アーチェリー, 脳性まひ7人制サッカー, バレーボール(知的障害者)), 川口市(水泳), 越谷市(精神障害者バレーボール)である。

これらの内, 第3回全国障害者スポーツ大会では掛川市で開催された種目を, 第4回障害者スポーツ大会では熊谷市での種目を中心に述べて行く。各大会の趣旨や個別記録等は, 大会実行委員会が各大会の報告書をまとめて冊子およびWeb上で公表しているので, そちらを参照して頂きたい。

第3回障害者スポーツ大会(わかふじ大会)では, 2003年11月8日, 掛川市の「エコパスタジアム」および「エコパアリーナ」を訪れた。障害者スポーツに関しては, この時の観戦が初めてであり, 予備知識も持ち合わせていなかった。逆に, 予断や先入観を持たずに観戦できたのかもしれないとも思っている。

アーチェリーは, 50m と30m 離れた標的を射るもの(50・30m ラウンド)と, 30m 離れた標的のみを射るもの(30m ダブルラウンド)の2種類があり, 直径80cm(リカーブ:障害区分別, 男女別, 年齢区分別)あるいは40cm(コンパウンド:男女別, 年齢区分別)の的中心

* Inspection Records of Sports Games for the Challenged

** Hazime MIZOGUCHI, Masanori YAMAGUCHI and Keisuke YAZAWA, 立正大学社会福祉学部
キーワード: 障害者スポーツ, 全国障害者スポーツ大会, わかふじ大会, 彩の国まごころ大会

に向かって72射して得点を競う競技である。観戦していても車椅子を使用しているということを除けば、「障害者」のスポーツなのかどうか不明な位であった。場内アナウンスでも、とくに障害者スポーツということではなく、オリンピックでも障害がある選手が出場し、入賞することは珍しくないと解説していた。実際、ルールもとくに障害者に配慮したものではない。集中力と平常心が求められること自体がリハビリテーションにつながるのとことであった。

知的障害者のソフトボールも、盗塁やスクイズが認められていないこと、男女の区分がないこと、本塁から投手板までの距離が女子用の12.19mであること以外、ルールは一般のソフトボールと同様である。試合を観戦していても、揃いのユニフォームを着てベンチ前での円陣を組んでの気合いを入れる様子や声援、ゲーム展開などを見ても「障害者スポーツ」という印象は薄かった。同じく知的障害者のフットベースボールは、バットでボールを打つのではなく、ピッチャーが股の下から両手で転がしたサッカーボールを打者ではなくキッカーが蹴りゲームを行うというものである。盗塁、デッドボール、パスボールは認められていない。ユニフォームは上がソフトボール、下がサッカーというもので、ゲームの流れもソフトボールと同様で、なるほどこのようなスポーツもあり得るなという印象であった。これもとくに障害者を意識したものとは感じられなかった。

フライングディスク (フリスビー) は、身体障害者と知的障害者が参加するもので、直径が23.5cmのプラスチック製の円盤を投げる競技だが、男女別および立位、座位の区別があり、飛距離を競うもの (ディスタンス) と障害区分や男女の区別なくゴールリング (5mあるいは7m) に向かって正確に投げその通過枚数を競うもの (アキュラシー) がある。ルールが単純で、見ていて結果の判明が容易でゲーム感覚があるものであった。しかし、視覚障害がある選手に音で位置を知らせ、そこへ見事に飛んだときはやはり歓声が上がった。そう遠くない将来、アメリカのキャンパスでしばしば見られる何人かで行うフリスビーの豪快さも味わえるのではないかと思った。

これまで述べてきたアーチェリー、ソフトボール、フットベースボール、フライングディスクは、とくに障害特性を意識することなく競技を観戦できた。しかし、視覚障害者のグラウンドソフトボールや話に聞いていた車椅子バスケットボールは、これが障害者スポーツの一般的なイメージかもしれないと思わせるものであった。グラウンドソフトボールは、男女の区別なく1チーム10名で、その内4名以上が全盲者、かつ投手が全盲 (アイマスクと赤い腕章を両腕に着用)、捕手が弱視者と決められていること、走塁方向の情報を与えるため各塁にコーチがいること、走塁ベースと守備ベースが分かれていることなど、このゲームの観戦で初めて知ったことであった。また、音を頼りに競技が進められることから、試合中に応援や声を出すことがその進行の妨げとなる。粛々と試合が進み、攻守交代になると大声援、歓声というコントラストも興味深かった。

さて、車椅子バスケットボールである。元来障害者スポーツが脊髄損傷などで下半身不随で車椅子の使用者の競技から始まったことを思えば、この競技がもっとも歴史と伝統をもつ種目

の一つということになる。競技用車椅子をあたかも身体の一部のように自在に使いこなし、コート斜めに颯爽と進んでいきながら行うパスやシュートなど練習風景自体、十分にスポーツの醍醐味を感じさせるものであった。

チーム紹介は、監督の方が各選手よりも先であったが、競技チームの育成には高度な指導能力を有するコーチが必要であり、その貢献を示しているように感じられた。それと同時に、楽しむスポーツよりも「勝ち」を意識した文字通りの「真剣勝負」の雰囲気伝わってきた。選手たちの体型をみても、上半身はトレーニングを積んで鍛えられていることが一目瞭然であった。

第4回全国障害者スポーツ大会（彩の国まごころ大会）も、観戦する機会を得た。上述の第3回大会とは重複しないものを述べていきたい。まず、熊谷市の「熊谷スポーツ文化公園陸上競技場」で11月13日に催された開会式である。開会前は、この大会の「コバトン」と名づけられた埼玉県鳥「シラコバト」の着ぐるみのマスコットが登場し、司会者と一緒に観客の応援練習である。カラフルなタオルをもち、昨今の福祉的な場面では定番とあって良いほどよく歌われるヒットソング「世界に一つだけの花」を手話通訳とともに演じた。大会の雰囲気を盛り上げるのに極めて効果的だった印象をもつ。

そして、スコアボードに「開会式」の文字が電光掲示され、皇太子殿下ご臨席の下、開会式が開始された。代表者、来賓のあいさつの後、練習の成果を如何無く発揮していたと思われた生徒によるドリルに続き、県名プラカード、県旗に続いてほぼ北から南に各都道府県の選手・役員団が揃いのユニフォームを着衣し入場行進を整然と行った。車椅子利用者が先であった。スコアボードには、県花も映し出されていた。興味深かったのは各都道府県が一つの集団としてではなく、複数のところもみられたことである。開催地を有する埼玉の場合も、行進の最後にさいたま市が189名、埼玉県393名と大選手団が続いていた。参加予定人員は選手3200名、役員2000名とのことであった。

この陸上競技場では、最終日の陸上競技を観戦した。あいにくの雨天であったが肅々とプログラムが進められて行った。トラック競技では女子の200mで車椅子が競技用のものを使用する選手と日常生活に利用しているものと思われるごく通常のものを使う選手が同時にスタートしたのが印象的であった。それぞれ懸命に車椅子を進めているのは伝わって来るが、車椅子の性能の差は歴然であった。パラリンピックでも先進工業国の技術の粋を取り込んだものとそのような技術を有しない発展途上国との使用用具が問題にされているが、同じ現象がここでも見られたのである。マイペースで走る通常車椅子を使っている選手には大声援が送られていた。

種別スポーツの印象記の最後に熊谷駅近くの熊谷市立市民体育館で行われた「バレーボール（聴覚）」について述べたい。1チーム6名が出場し、ルールは通常の6人制バレーボールと同様であるが聴覚障害者が参加をしているため審判のホイッスルが聞こえにくいことがあり、審判がジェスチャーで判定を下す点が異なる。決勝戦などは聴覚障害があるとはどこにも感じられないほど、レシーブ、トス、スパイクが見事なコンビネーションで行われていた。試合の

前後には円陣を組むが手話でコミュニケーションを取り、「気合」を入れていた点や応援団も「がんばれ！」などと書かれたボードを掲げながらのものだった。

以上、2003年の「わがふじ大会」、2004年の「彩の国まごころ大会」で観戦した各種競技の印象を述べてみた。なお、第4回全国障害者スポーツ大会埼玉県実行委員会が編集・発行した「観戦ガイドブック」の最後には「個人競技障害区分表」が掲げられている。これをみると、肢体不自由者、視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者のみ障害区分が記されて、中でも、肢体不自由者には上肢、下肢、上下肢、体幹、脳原性麻痺以外の車椅子使用、脳原性麻痺と細分化されている。一方、障害者基本法に謳われる三障害でも精神障害者は障害区分に記載されていない。彼・彼女らはオープン競技として「精神障害者バレーボール」が種目に挙げられているだけである。

これらからも障害者スポーツがストック・マンデビル大会に端を發し、「車椅子」を使う当事者のスポーツ大会が主体である印象は拭い去れなかった。実際、上述の「観戦ガイドブック」の表紙には車椅子に乗ったマスコット「コパトン」が載せられていたのであった。